様式３

ご参考

２０１４年度学院留学　研究成果概要

種　　別：学院留学（長期／短期）
所属・職・氏名：神学部・教授・淺野　淳博
研　究　課　題：イエスの死とそのメタファ・ミックスに関する研究
留　学　期　間：２０１４年０４月０１日～２０１５年０２月２４日
留　　学　　先：英国・オックスフォード
研　究　機　関：オックスフォード大学

研究成果概要（日本文（全角）の場合は3,000字（Ａ４、２ページ）程度）

今回の在外研究においては、その研究課題「イエスの死とそのメタファ・ミックスに関する研究」にしたがって、3 つのプロジェクトを行った。

1．追放儀礼メタファに関する研究プロジェクト

これははたしてパウロがイエスの死の救済的価値を説明するさいに追放儀礼メタファを用いたかに関する研究であり、4-8 月の 5 ヶ月間にわたりこのテーマの研究を行った。具体的には、1 コリント書 4 章 13 節 b におけるパウロの表現がはたして追放儀礼を意識したものであったかを明らかにすることが目的である。このプロジェクトはおもに文献研究であるので、オックスフォード大学の中央図書館をはじめとする古典資料を閲覧できる図書館を用いて、研究を行った。

従来、この聖書箇所に登場する περίψημα と περικάθαρμα という 2 つの語が追放儀礼の被追放者を指す専門用語であり、パウロはイエスの生き様と死に様に倣う自らの使徒としての生き方を追放儀礼の被追放者に喩えて教えている、という理解が一般的である。しかし今回の研究をとおして、これらの 2 語が追放儀礼の専門用語であるという証拠が 9 世紀にいたるまで皆無であることが分かった。おそらくこれらの 2 語は、1 コリ 4 章におけるパウロの献身的奉仕を勧める教えが起因となって、教会 800 年の歴史における神学的作業の結果として—おそらく 9 世紀のコンスタンティノープル総主教フォティオスが関わって（フォティオス『レキシコン』）—、追放儀礼と結びつけられたのであり、本来これらの語にはこの儀礼を示すニュアンスが存在しなかった、というのが今回の研究の結論である。もっとも本研究の結論は 1 コリ 4.13b に関する、しかもそこで用いられる 2 語に関するものであり、パウロが他所（ガラ 3:13, 2 コリ 5:21）で用いる表現等において追放儀礼を意識していると言う可能性を否定するものではない。

この結論を受けて、1 コリ 4:13b のこれらの 2 語の歴史的・文化的背景が何であるかに関しても推論を提示した。すなわち、これらの語の背景には詩編 22 篇 7 節にある周縁化された僕の様子があり、原始教会はイエスの死を、この詩編 22 篇 1 節において「我が神、我が神、なぜ私をお捨てになるか」と叫ぶ受難の僕と結びつけたのであろう、という推論である。同時に本論文では、従来の新約聖書学における追放儀礼自体の理解が中世のテクストに影響されており、著しく正確を欠いている点をも指摘した。

この研究の成果は以下のように公表される。まず関西学院神学部紀要『神學研究』62 号の研

究ノート:「古代地中海世界の追放儀礼に関する一次文献の分析とその解説」、131-51 頁である。これは 2015 年 3 月に刊行済みである。そして 2015 年 3 月 1 に、"'Like the Scum of the World, the Refuse of All": A Study of the Background and Usage of Περίψημα and Περικάθαρμα in 1 Corinthians 4:13b'と題する研究論文を執筆し、Society of Biblical Literature が募集する Paul J. Achtemeier Award に応募した。また現在は、「塵芥について（1 コリ 4:13b）:イエス受難のメタファに関する一考察」と題する論文を執筆中であり、この内容を 2015 年 9 月に開催される日本新約学会において発表することになっている。またこの論文は同学会の学会誌に来年度寄稿する予定である。

2．マカバイ殉教思想に関する研究プロジェクト

これは、はたしてパウロがイエスの死の救済的価値を説明するさいにマカバイ殉教思想の影響を受けたかに関する研究である。9-12 月の 5 ヶ月にわたり、オックスフォード大学の中央図書館をはじめ第二神殿期ユダヤ資料を提供する複数の図書館を利用して研究を進めた。具体的には、2, 4 マカバイ書に見られる殉教者の救済的意義とその復活思想を詳細に検討し、パウロの書簡群に見られるイエスの死の救済的意義とその復活思想と比較し、いかなるかたちでマカバイ殉教思想がパウロに影響を与えたかを考察した。

この研究においてとくに比較の対象としたのはパウロが執筆したガラテヤ書である。まず大枠となる主題を比較した。両資料においてユダヤ人の食事規定と割礼規定が問題となっている。これに関しては、たんにユダヤ人が非ユダヤ人と遭遇するさいに顕著となる文化的相違—人類学的な表現を用いるならば民族アイデンティティの顕現要素—が述べられているのであり、これはなにもマカバイ諸書とガラテヤ書に限られた主題ではないと理解することも可能であろうが、この主題が同様の語彙によって語られるとき、やはり何らかの資料的依存があることを推測する必要がある。

そこで両資料のあいだでどのような語彙が共有されているかを分析した。これに関しては詳しく述べないが、マカバイ諸書が所属する旧約聖書のギリシャ語訳である七十人訳（LXX）と新約聖書において、ともにまれにしか用いられない語が両資料に登場する例が散見され、この現象にのみ鑑みたとしても、やはりパウロがマカバイ諸書に資料依存したか、あるいはその背景にある思想の影響を受けた可能性を看過することはできない、という結論に至った。

また歴史的背景もこの結論を支持する。この研究において、マカバイ諸書が執筆された歴史的背景であるセレウコス朝シリアのアンティオコス 4 世による圧政と、原始教会が派生し、またパウロがガラテヤ書を執筆した時代背景にあるローマ皇帝カリグラによる圧政との両方が、共通してユダヤ教の純粋性と彼らのアイデンティティを揺るがすものであったことを確認した。

しかし、パウロは無批判にマカバイ殉教思想を受け入れたわけではない。彼がこの伝統をいかに再定義したかを理解するために、本研究においては迫害者の心理に関する考察を行った。パウロは改宗前に教会を迫害していたが、この迫害活動の過程で原始教会の指導者の 1 人であったステファノの殺害に直接的に関与した。現行のパウロ解釈においては、殺害者としてのパウロという側面に十分な注意が払われていない。迫害者であり殺害者であるパウロの心理をはかるために、本研究では戦争歴史家、戦争分析家、また帰還兵のカウンセリングに従事する心療内科医等の報告を参考にした。とくに注目したのは、訓練を受けた兵士が敵兵を前にして殺害を目的として引き金を引く確率が、予想以上に低いという点である。第二次世界大戦に至るまで、この効率が 15%程度であった。またある心理学者の分析によると、敵兵をもっとも効果

的に殺害する上位 2%の兵士たちに共通な要素は、彼らがサイコパスの特徴を有している。これらの分析結果を基にして、「人は一般に人を容易に殺すことはできない」という前提のもとでパウロの殺害体験からくるトラウマを考慮に入れたテクスト解釈が必要である、という結論を導き出した。この結論は、マカバイ殉教者をだしたユダヤ人のマカバイ解放運動において、「殺害者としての殉教者（Martyrs as Murderers）」という視点でマカバイ殉教思想を再評価することの必要性を提案した。またこのような再評価によって、パウロが伝統的なマカバイ殉教思想を再定義したのだと結論づけた。

この研究の成果は、その一部を 2015 年度の大学院における新約聖書特殊講義・研究において教えながらさらなる修正を加え、執筆予定である『贖罪のシステム（仮題）』の一部として執筆を始めている。

3. ギリシャにおける現地調査

ギリシャでは、アテネ、ピレウス、イスモス、レフカダ、コリントス、テサロニキ、カヴァラ、フィリピの各地を訪問して、それぞれに特有な課題の調査を行った。紙面の関係上、レフカダにおける追放儀礼の調査について述べる。他の地域での調査の手順もこれと同様である。

ストラボン著『地誌』には、レフカダ島で追放儀礼が行われていたことが記されている。この儀礼に関する記述によると、レフカダの追放儀礼の被追放者は殺害されない。しかし研究者のあいだでは、被追放者がアポロン神殿のある崖の上から突き落とされるので、死を免れることはなかったのではないか、との意見がある。Dennis Hughes はこれに反論を試みるが十分でない。

今回はレフカダ島を訪れ、実際にアポロン神殿があったレフカダ岬に足を踏み入れ、はたして被追放者が崖から落ちて死なずにすんだのかを検証した。結論のみを述べると、岬のどこから突き落とされるかによって、死を回避できない場合もあれば、安全に着水できる場合もあることが判明した。被追放者が殺されるかそうでないかは、古代儀礼の残虐性という倫理的問題に大いに関わると同時に、犠牲と追放儀礼のメタファミックスという概念に少なからず示唆を与えるものである。

この研究の成果は、上述の著書『贖罪のシステム』に反映されることになる。

以上

研究成果概要のデータは、gakunai@kwansei.ac.jp まで提出してください。